

作るべし詩大雅^章 酌^{トホク}に、^{トホク}洞酌彼行潦、挹彼注茲、可以餽饘、注に餽蒸米一熟、而以水沃之、乃再蒸也
と見ゆ、皇國往古の常食にて、大床子の御膳などこれ也、源氏末摘花に、御かゆこはいひなどめ
して云々、同薄雲にはかなきくだものこはいひばかりは、きこしめす時もあり云々、^中稱名
院殿吉野詣記に、かゆこはいひなどもとりあへず云々、

〔飯粥考〕強食^略、^中古事記の^{仲哀}段に、以飯粒爲餌、釣其河之年魚云々、神功紀に、^{ツテハリヲ}勾針爲釣、取粒爲餌
云々、飯粒^{これらも、強飯の}仁德紀の^{四年}條に、炊烟亦繁云々、万葉集^二の^{イヘニアレ}に、家有者、^{イヘニアレ}筥爾盛飯乎、^{イヘニアレ}草枕旅爾
之有者、^{シアレ}椎之葉爾盛、^{シアレ}また^五の^{カマド}可麻度柔播、^{シアレ}火氣布伎多、^{シアレ}受許之伎爾波、^{シアレ}久毛能須可伎氏、^{シアレ}飯炊事
毛和須禮提、云々、伊勢物語に、手づからいひがひとりて、けこのうつはものにもりけるを見て
云々、などあるによりて、その飯にて炊たる強食を筥子^{碗飯とは別にて、筥子にもれる}に盛て
喰しことおもふべし、延喜大炊式に、宴會雜給飯器、參議已上並朱漆碗、五位以上葉碗、命婦三位
以上^{キケ}蘭筥^加、五位以上命婦並陶碗^加、大歌立歌、國栖笛工、並葉碗^{五月五日、青柏、七月廿}と見えて、
此比より碗にも筥にも葉にも盛こと、なり、今の世はわづかに魂祭に荷葉碗を用るわざ殘
れり、日本紀竟宴歌^略に、

玉がしはをかたまの木のかみ葉に神のひもろぎそなへつるかな、^註とよめるも、葉碗
にて強飯のさまするし、大床子の御膳も強食にて、すべて吉凶式正の禮に、必強食を用るは、古
風の今に傳はれる也、

〔玉勝間^五〕おこはまはり

今の世、女の言に強飯をおこはといへり、大神宮年中行事に、御強^{オカ}と見ゆ、又菜をまはりといふこ
と、同じ書に、御廻^{マハリ}八種とあり、枕さうしにはあはせと見えたり、

〔松屋筆記^{百四}〕飯を碗に盛事